

丸山由紀子作 「ツッパリ」

- 効果音 (教室のガヤ)
- ナレーション ここは青春高校 2 年E組の教室。冬休みも終わり、まだその名残が残って落ち着かない生徒。受験勉強に余念のない生徒。いろいろ様々なようです。
- 藤堂孝之 あ～あ、面白くねえな。休みが終わったら、また学校に縛られて、勉強勉強。ああ面白くねえ。何かこうスーッとすることねえかなあ。
- 宗形仁 ほんとだよなあ。1 年の時から、こんなに勉強勉強やってたら頭が腐っちゃうよ。
- ナレーション この二人、藤堂孝之と宗形仁は、勉強嫌いで気が合って、クラスからはみ出ている存在のようです。
- 孝之 あ～あ、面白くもなんともねえよ、もう。
- 男子 おい、藤堂と宗形、うるせえぞ。静かにしろよ。ちっとも勉強できやしねえよ。
- 宗形 なんだと？ もう一度言ってみろ。
- 男子 「うるせえ」と言ったんだよ。勉強の邪魔だ。
- 宗形 何?!
- 孝之 おい、よせよ、宗形。そんなやつ相手にしてしようがねえだろ。
- 宗形 ま、それもそうだな。
- 孝之 あいつら、お勉強が好きなんだと。おれたちみたいなバカは邪魔なんだとさ。お望み通り消えてやるよ。おい宗形、行くぞ。
- 効果音 (扉の閉まる音)
- 宗形 おい藤堂、どこへ行くんだよ。
- 孝之 いいから来いよ。おれの愛車で飛ばそうぜ。宗形、後ろに乗れよ。乗ったか？ よし行くぞ!
- 効果音 (バイクをふかし、発車する音)
- ナレーション 彼、藤堂孝之の父は、ある有名な会社の社長で、そのため、孝之に跡を継がせるために、孝之をある有名大学に入れようとしているのです。バイクを飛ばしながら、ついこの間の父とのいさかいを、孝之は思い出していました。
- 孝之の父 おい、孝之。お前、勉強してるのか？ この前のあの成績はなんだ！ あれじゃ、西京大学は夢の夢だぞ。なんのためにわたしはこの高校に入れてやったんだ？ よく考えてみろ。お前の成績じゃ、この高校にはとても入れなかったんだぞ。
- 孝之 ああもう！ そんなこと、おれの知ったことじゃねえよ。おれが好きで入った高校じゃねえんだぞ。成績が悪くて当然じゃねえかよ。
- 父親 孝之！ それが親に向かって言う言葉か。
- 孝之 うるせえな。あんたなんか、おれは親とは思っちゃいねえんだよ。おれはあんたの人形じゃねえよ。おれの道はおれが決めるよ。おれはおれのもんだ。だれのものでもないんだよ！
- ナレーション その時、藤堂たちのクラスでは――
- 先生 では、出席を取る。(以下、それぞれに返事)尾崎、青田、岡、香西、藤堂、…藤堂はいないのか？ 宗形もいないな？ またあの二人、一緒か。だれか、あの二人を見つけたら、職員室に来るように言ってくれ。それでは授業を始める。教科書を開いて。
- 男子 またあの二人か。学校サボればカッコいいと思ってんだから。ツッパリもいいとこだぜ。おい

秀美、お前もそう思ってたろ？

岡秀美

そうね。でもあの人たち、あれが本当の姿じゃないと思うわ。自分で何をしているか分からないのよ。わたし、あの人たちに知らせたいの、イエス様のことを。

男子

ああ、秀美、クリスチャンだったんだな。でも、果たして彼ら、キリスト教なんかには耳を傾けるかな。まあせいぜい頑張ってくれ。

秀美(モノローグ)

(エコー)わたしはそうは思わない。神様はきっとあの人たちを導いてくださる。神様、どうぞあの人たちに手を差し伸べてください。そしてどうぞこのわたしに、勇気を与えてください。

ナレーション

彼女、岡秀美は、2年ほど前に、自らもツツパリの生き方に疲れて、その苦しみの中からイエス・キリストを信じたクリスチャンでした。その時から、かつての自分のような生き方をしている二人のための、彼女の祈りは始まったのです。そのころ、藤堂君と宗形君は喫茶店を出て、また二人バイクに乗って海岸通りを走っていました。

効果音

(バイク音)

宗形

うおーっ 気持ちいい！

孝之

全くだよな。おっ、あいつら。宗形、あいつ見てみるよ。

宗形

あ、あいつら、西高のやつらだ。クソ、女連れだぞ。おい、藤堂、抜いちまえよ。

孝之

お一任しとけて。宗形、しっかりつかまってるよ。

効果音

(バイク疾走)

孝之

あ、あ～～(悲鳴)

効果音

(救急車のサイレン)

孝之

ここはどこだ？ 病院？ どうして、こんなとこにいるんだ？ あ、バイク…。そうだ、角を曲がり損ねて、ガードレールに…。む、宗形。宗形はどうしたんだ？ イテ、イテ！ あ、しまった、どっかやられたんだな。…宗形、宗形はどこだ？ 宗形にもしものことがあったら…。おれ、おれ、どうしたらいいんだよ？ 宗形、頼む、生きててくれ。

秀美

藤堂君、起きちゃダメよ。

孝之

岡！ お前、どうしてこんなとこに？

秀美

学校に知らせがあつて、びっくりして飛んできたの。今、先生たちも来るわ。

ナレーション

孝之は、岡秀美が真っ先に駆けつけてくれたことを知って、一瞬、胸がジンと熱くなるのを覚えました。

孝之

岡、君、ずいぶん顔色が悪いようだけど、まさか宗形、宗形のやつが…。

秀美

今、まだ手術中なの。出血がひどくて。

孝之

宗形に何かあったら、おれ、どうしたらいいんだろう。おれがやってきたことは一体なんだったんだろう。宗形、おれたち、何してきたんだろうなあ。カッコいいと思ってやってきたこと、その結果がこれか…。死んで終わりかよ。あとに何が残るんだ？ 親に反抗して、学校サボって、ただそれだけじゃないか。宗形、お前、苦しいか？ 痛いかな？ おれにはなんにもしてやれない。おれ、なんにもできない。あの時、あの時、バイクにさえ乗っていなければ…。おれが死ねばいいんだ。宗形、^{ゆる}赦してくれよ！

秀美

藤堂君、そんなに自分を責めちゃいけないわ。宗形君も死ぬと決まってるわけじゃないし。

孝之

いや、そんなにひどいなら、もうダメだよ。おれは、おれはどうしたらいいんだよ。

秀美

わたしね、こんなこと言ったらまた「いい子ぶってる」って言われるかもしれないけど、藤堂君のこれまでの行動、自分なりに分かるような気がするの。藤堂君、今まで、しゃにむに突

っ張ってたでしょう？ まるで「おれはおれなんだ。だれもおれの中には入らせはしないぞ」
って感じで。

孝之 岡、お前、どうしてそれを？

秀美 ちょうど 2 年前のわたしがそれだったの。またいつか話す機会があるかもしれないわ。でも
ね、藤堂君。どうしてそんなに突っ張るの？ そんな生き方って寂しくない？ むなしくな
い？ 心の中では何かを、だれかを求めているんじゃないかしら。自分のありのままを受け
入れてくれるだれかを。

孝之 そんな人、どこにいるんだよ？ どいつもこいつも、自分のことばっかししか考えてないじゃ
ないか。それに大人は自分の思惑で人を利用していやがるんだぜ。しょせん人は独
りぼっちだよ。

秀美 藤堂君、聖書の中にね、イエス様のこういう言葉があるの。「人が、その友のために命を捨
てる。これより大きな愛はない。」(ヨハネの福音書 15:13) イエス様は、あなたのために命を
捨ててくださったのよ。

孝之 そんなこと信じてるのか、お前は？ 命を捨てるほどに愛してくれるはずの神が、どうしてこ
んな目に遭わせるんだよ？ 宗形、宗形のやつは死にかけてるんだぞ！

秀美 ううん、イエス様は決してお見捨てにならないわ。(だんだん声が弱くなる。)イエス様は、本
当に藤堂君や宗形君を愛して下さって、そのために、ご自分の命を、命を…(エコー)。(気
を失い、倒れる)

孝之 おいおい、岡、どうしたんだよ。おい岡！ だれか、だれか来てください！ だれか～！

効果音 (ドアが開く音)

医師 あ、君、こんな所に。しばらく休んでなきゃダメだと言ったのに。どれ、(脈を診る)うん、大丈
夫だ。栄養剤をもう 1 本打つとこう。診察室に運んでくれ。

孝之 あ、先生。岡君は一体どうしたんですか？

音楽 (賛美歌)

医師 ん？ 何も話してなかったかな、君に？ 一緒に運ばれた、宗形君と言ったかな、彼の出血
がひどくて、血が足りなくて困っていたら、あの子が駆けつけて、話を聞いたら即座に「わた
しの血を」ってね。許容量じゃ間に合わないとなると、「ぜひもっと。わたしはどうなっても構
わない」とまで言うんだ。今時たいした子だよ。

孝之 …そうですか。あ、それで、宗形は？

医師 うむ。今晚が峠だな。合併症が出なければ、ま、大丈夫だろう。あの子がいなかったら、どう
なっていたか分からんとこだ。君たちもいい友を持ったもんだな。

ナレーション 孝之は、今まで味わったことのない何か熱いものが、体の隅々まで駆け抜けていくのを感じ
ました。その熱いものが、彼の心のツツパリの壁を溶かしていった時、岡秀美のあの言葉が、
新たな真実の響きを持って、彼の心の奥底に届いたのでした。

秀美(エコー) イエス様は、あなたのために命を捨ててくださったのよ。信じるあなたの友となったださる
のよ。

<完>